■“読む力”“理解する力”が全てに先立つ

前にも書きましたが、我が国の学校は、小学校の１年生から科目が多く有り過ぎます。大抵の国が、３年生までは学科が“読み”“書き”“算数”だけで、社会科や理科などはありません。“読み”の力の不十分なうちから社会科や理科の学習をしても、徒らに時間を費すばかりで効果が乏しいからです。ですから、どこの国でも学科の数を少なくしてその分国語の時間をふやしてゐますので、我が国の２倍以上もあります。

例へばドイツでは、3年生まで全体の5分の3までを国語の学習に充(あ)ててゐます。3年間に国語力、特に“読み”の力を高め、その力で他の学科の学習を進めるのです。どんな学科でも、教科書を読みそれを理解する事から始まります。だから、読みの力が強ければ学習がうまく行きますが、その力が弱ければ総ての学習がうまく行かなくなるのです。

『大学』に「物には本末あり、事には終始あり、先後する所を知れば道に近し」とあり、『論語』には「君子は本を務む」とあります。物事には本末軽重がありますから、それを行ふには先後の順序に従はねばならぬ、といふ事なのです。国語は総ての学科の本であります。ですから、これを先にしてその能力を高めれば、他の学科は自然とうまく行きますが、さうしなかったら決してうまく行きません。これを『論語』では「本立ちて道生ず」と言ひ、『大学』では「その本乱れて末治まることあらず」と言ってゐます。所が、我が国の学校教育は本を疎かにして枝葉末節に力を入れてゐるので、うまく行く訳が無いのです。

又、国語教育の中にも本末があります“読み”が本で“書く”“話す”“聞く”は末です。ですから、戦前の国語の時間は「読み方」の時間と呼ばれ、教科書は「読本」と呼ばれました。所が、戦後“聞く”“話す”“読む”“書く”が並列され、特に“聞く”“話す”が重視されるやうになりました。アメリカでは英語を使はない家庭も多いので当然の処置ですが、我が国ではその理由がありません。正に悪しき猿真似であったと言ふほかはありません。

真の“話す”力は“読み”に因って養はれるのです。“読み”の無い唯“話す”だけの学習は徒らに饒舌を増すだけです。“聞く”学習も“読み”の学習が深まれば自然とその能力が高まります。“読む”学習を怠ったら、いくら“聞く”“話す”学習に努めてもその能力は向上しないのです。

前の章でも述べましたやうに、我が国の文字教育は、明治以来「読み書き」が同時に並行して進められて来ました。これも誤りです。“読み”が本であり、先でなければなりません。読みが深まり字形の認知力が高まれば僅かな学習で容易に書けるやうになるのに、同時に並行して学習させてゐるから書くのが難しいのです。それも本質的な構造に関係の無い枝葉末節の点画や筆順の指導に力を入れ過ぎてゐます。これが子供を漢字嫌ひにさせてゐる最大の原因なのです。